



「生かされて生きる」

「福岡いのちの電話」後援会副会長

林 覚乗

(南蔵院 住職)



皆様、明けましておめでとうございます。今年も素晴らしい一年であってほしいものです。

昨年は福岡いのちの電話も30周年を迎えました。私自身30年以上前の設立準備委員会から係ってきた者として感慨深いものがあります。福岡いのちの電話によって私のボランティアの心は育てていただきました。現在多くのボランティア団体などのお手伝いをする事になったのも、すべてはいのちの電話によって教えられた、その延長線上にあるものです。

どんなにすばらしい理想をかかげても、ボランティア団体にとって人材確保と金銭面での苦労はいつの時代にも於いても最も困難なことです。福岡いのちの電話は本当にたくさんの方々それぞれの立場と役割を認識し、努力し乗り越えてこられました。その結果が現在のすばらしい姿ではないでしょうか。

心に闇を持ち、だれにも心を開かず、悩み苦しみをだせる人々が、最後にすがる場所がいのちの電話であるからこそ、そこに集い、救いの手を差し延べるすべてのボランティアは自分が生かされていることに感謝し、自分の大切な命を輝かせることで、多くの人々の幸福につなげねばならないのです。相談する人よりも先に相談員が疲れてしまってはならないし、自分が幸福を感じていない人は他人を幸福にしてあげられるはずがないでしょう。

現代は本当に物質的には豊かになりました。しかしながら、毎日の生活をつづける中で幸福を感じないのはなぜなのか。それは物質的豊かさが生活を便利にするかわりに、人間関係を破壊してしまうからです。例えば身体に不自由がある人がいれば、昔は誰かが肩を貸し、ドアを開ける時にも誰かが手伝いました。誰かによる手助けがなければ生活ができなかったのです。それはつまり人間同士のつながりが必要で、なおかつそれがあったということです。しかし現代は電動椅子もあり、ドアは自動に開くようになり、ボタン一つでご飯も炊ければ、お風呂も沸かせるようになりました。一人で生活できる。それは素晴らしいことのようにですが、一方でおのずと人間関係が薄れていくことでもあります。そして孤独な心を豊かな物質文明の中で育てていくことになりました。現代は他人の幸福をねたんだり、うらやんだりして生きる人がいます。また他人の不幸を喜ぶような人間も普通になってきました。

だからこそいのちの電話に於いては、理事も評議員も相談員も、応援する人々もすべての者が他人の幸福を願い、他人の不幸を共に悲しむことができる人間でなければならないと思います。いのちの電話がなくても、皆がいきいきと幸福を感じながら生きることができ、社会が来るまで、共にがんばりましょう。